郷土館・企画展

糸機（いとはた）とくらし

～衣の原点から近代三島の発展まで～

特別出品：中米インディオの織物（内田コレクション）

開　催　主　旨

人の暮らしの三要素と言われるものに衣・食・住がありますが、本企画展ではその内の「衣」をテーマに取り上げ、人がどのような衣生活を送ってきたか、また私たちの郷土で衣生活がどの様に発達したかなどを調べ、展示してみました。

一般に、衣生活は単に「着ること」と理解されていますが、実際は、そこに到達するまでに、衣を支える人々のさまざまな知恵と苦労と経験の積み重ねがありました。

古代においては、衣料は自給自足が原則でしたから、糸の原料となる繊維を調達することに始まり、糸を紡ぎ、布に織り、それを着物に仕立てるまで、すべてが自らの手作業で行われたものです。

また外国では、衣料の自給自足を行っている少数民族が、現在でも存在すると聞きます。

日本でも社会や産業構造が近代化されるまでは、庶民の衣料は大半が自給自足によって賄われていたものです。三島やその周辺の農村では各家庭がハタゴ（織機）などの糸機道具を所有し、綿や繭から糸を紡ぎ、ハタゴにかけて布を織り、家族の着物を作っていたといいます。

糸や布を染める染色も、また、糸機に関わる作業です。水が豊富できれいな三島には、紺屋をはじめ、染め物屋が軒を並べていました。昔懐かしい戦前の商店街には、紺地に屋号や家紋を染め抜いた大小の暖簾が掛けられ、風情ある町並みを構成していたものだそうです。

展示では、以上のような衣の原点から近代三島の発展までを、各種の資料構成で展望してみました。

糸機のくらしをささえた女達

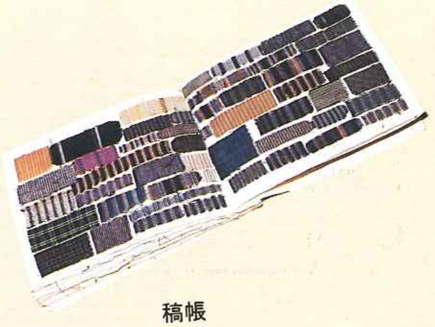
かつての農村では、新参の嫁を、「機もよく織る、田もよく植える、３３把の稲も扱く」と言って、一人前の女として認めたものだといいます。機を織ること、すなわち家庭の衣料を賄えることが、女の重要な仕事に位置付けられていました。

ハタゴ（織機）は、どこの家でも機部屋や部屋の一角に設置し、主婦たちは農作業の暇を見付けては織ったものだそうです。

農家からハタゴが姿を消したのは、戦後のことでした。繊維産業の工業化にともない、製品となった衣料が大量に出回るようになったことが大きな要因です。不要となったハタゴは、それから何年間も農家の納屋などに保管されていましたが、現在ではそれも失われつつあります。

若い頃、盛んに機を織ったことのある一人の老婆が「ハタゴをごみといっしょに燃やしてしまったときは涙がでたっけ」と、悲しそうに語っていたのを聞いたことがあります。老婆にとっては身を切られる思いだったのでしょう。

ここでは、かつての機織り娘として、地域の糸機を支え、くらしの衣料を賄ってきた何人かの老婆たちに聞いた話をまとめました。



稿帳

糸玉

中村ぬい さん

明治２１年生

伊豆佐野の人。ぬいさんは近くの家より嫁いだ。母親は遠藤さくといい、ぬいさんは１６才の頃より母から手織を習った。

さくさんは、ぬいさんが１３才頃まで、柴を燃やして、そのあかりで綿をくり、糸車で糸を紡いだ。

糸車で３回廻して撚りをかけて管に巻く。こうして一晩に５０匁（約２００ｇ）の糸を紡いだという。その後、機械糸（紡績）が売られるようになり、明治３７～８年頃は１コーリ（１×２００匁）７円位した。

高橋やえ さん

明治１４年生

函南町仁田の人。長泉村納米里より嫁いで来た。娘の頃、手織を教える先生が来て、綾織やいろいろ教えてくれて１０枚余の綜（アセ）を使い、８本の足（ふみ木）を使って織りガスリも織ったという。織った見本や仕掛けの解説の帳面などを郷土館に寄付してくれた。高橋さんの家には昔から木綿地があった。毎年綿を作り、綿打屋から廻って来たふとん綿など作った。

加藤とめ さん

明治１５年生

三島市山田の人。

裾野の麦塚より山田の加藤家へ明治３２年に嫁いだ。その頃、隣の杉山さんにおわきさんというおばあさんが居て、綿を紡いで、地機で織っていた。

とめさんも自分も綿を紡げるとのことで実際に紡ぐところを見せてもらうつもりで訪ねたところ（１０月下旬）、老人の日に（９月１５日）出たのが無理で、床について再起出来ずに亡くなられた。

渡辺さだ さん

明治22年生
1971年8月21日、バイクで裾野から千福を通って須山まで行きさださんを訪ねる。
さださんの話　地機を母が織っていた。杼(ヒ)があったが、最近は見当たらない。母は綿を作って糸を紡いだ。糸は保土沢に紺屋があって、そこで染めた。

手くず

地機杼

中村さわ さん

明治18年生　函南町桑原
三島市多呂（旧中郷村）に生まれた。
当時、小学校は4年までであったが自分は行かなかった。妹は行った。早くから機を織る手伝いをした。少女の頃は宮倉に製糸工場があって、そこへ糸とりに行った。終わるのは7時すぎ。夜なべをすると9時にもなった。帰るのがこわかった。19の時に桑原へ嫁に来た。広い畑や山の仕事は苦労の多い暮らしであったと、述懐していた。植物染料にハルの木の皮で染めたと聞き、後にそれは榛の木(ハンの木)であることを知った。この木は早春に一番早く芽を吹く木で、春の木だという。

渡辺とみえ さん

明治28年生　韮山町山木
桑原の秋山方吉氏より嫁ぎ、手織は随分織った。綿糸1コーリ（1×200匁）ずつ買った。三島の山城屋、遠州屋等で染めて織った。ずみの木の皮を煎じて糸を染めて織ったこともある。カスリも織った。手織は織らなくなって、お宮さんの裏に置いた。その頃はお宮さんの裏に使わなくなったハタゴが山のように積んであった。

古屋きぬ さん

明治30年生　三島市北沢
ここへ嫁に来た時、姑から手織を渡されて、姑は織る次から次と機の仕掛けをして、自分は精魂を傾けて織り続けた。自分ほどこの村で機を織った人はいないだろう。朝仕掛けた機を夜おそくまでかかって織った。嫁に来た頃は辛い思い出が多かった。綿を紡いで織ったり、繭から糸を引いてその時に出る手くずまで引っ張って糸にしてヨコ糸にして織った。

田辺つね さん

明治25年生　三島市松本
田辺利雄氏　母
つねさんは北狩野村（現大仁町）下畑の生まれ。
母より手織りを習い、戦後まで織った。姑は地機を織った。その使った大きな杼（ヒ）があったが、現在は見当たらない。娘の頃、上和田の高田という親類の家で綾織を習った。
唐草の布団を山城屋で染めたが、赤いベンガラ入りは1反染代が1円30銭、入らないのは90銭位だった。

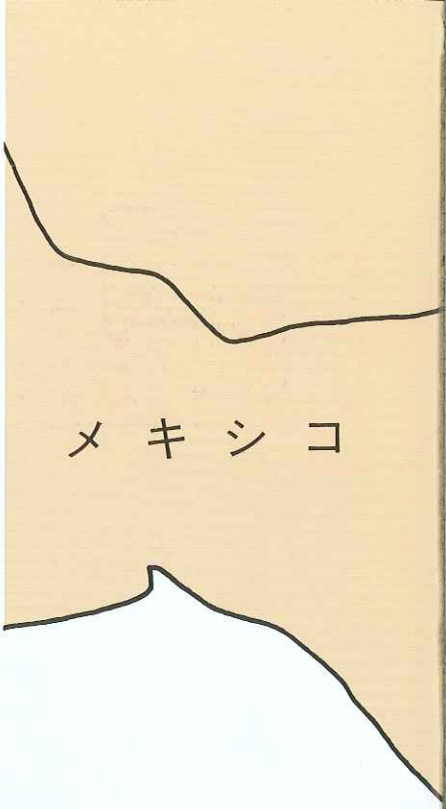
グァテマラ(中米)インディオの衣料

グァテマラのインディオは、現在でも、華麗、繊細な織物を手作りで生産することで知られていますが、その模様には動物や鳥、植物、空想の動物などが織り込まれるなど、実に様々な意匠がこらされていて、インディオの織物文化の高さを象徴しています。

「高い暦文化（天文学）の発達した地域には、高い織物文化がある」と言われますが、かれらの歴史的な背景に高度な天文観測で知られるマヤ文明を持つことから、そのことが証明されます。

現在のグァテマラでは、かつて行われていた糸紡ぎは既製品の糸の入手に変わり、草木や貝での染色方法は化学染料に変わるなど、先進国の文明の波がおし寄せてはいるものの、原始的な機織り機を用いての布作りやその布を使っての民族衣装作りは、未だ盛んに行われているといいます。

特に女性たちの世界では、自分が織った最良の民族衣装を着ることは誇らしいこととされ、部族の伝統の衣料生活が生きています。



グァテマラの民族衣裳

ウィピール
女性の上衣。やや横長に、二つ折りにした布の中央に頭を通す穴を丸くくりぬいた貫頭衣型である。インディオの女達は、自分のもの、子供達のもの、家族すべてのものを織る。

シンタ
女性の頭を飾るシンタには、紐、帯、幅広い布などのように形に変化がある。

コルテ
輪に縫った布の中に下半身を入れ、巻き付ける腰巻き型スカート。

ファハ
コルテを押さえる腰帯。

スーテ
荷物や赤ん坊を包んで背負う。たたんで頭に載せ、日除けにすることもある。万能風呂敷型である。

ペラッヘ
朝晩や、風の吹く時に身を包むショール。

リストン
髪飾りのリボン。

縫取織
一見刺繍のように見える色とりどりな複雑模様は、ピックや指を使って、女達の根気強い手作業で織り込まれたものである。

ウィピール

パンタロン(Tzut

ウィピール(Tzutujil族)

ウィピール（ネバフ）

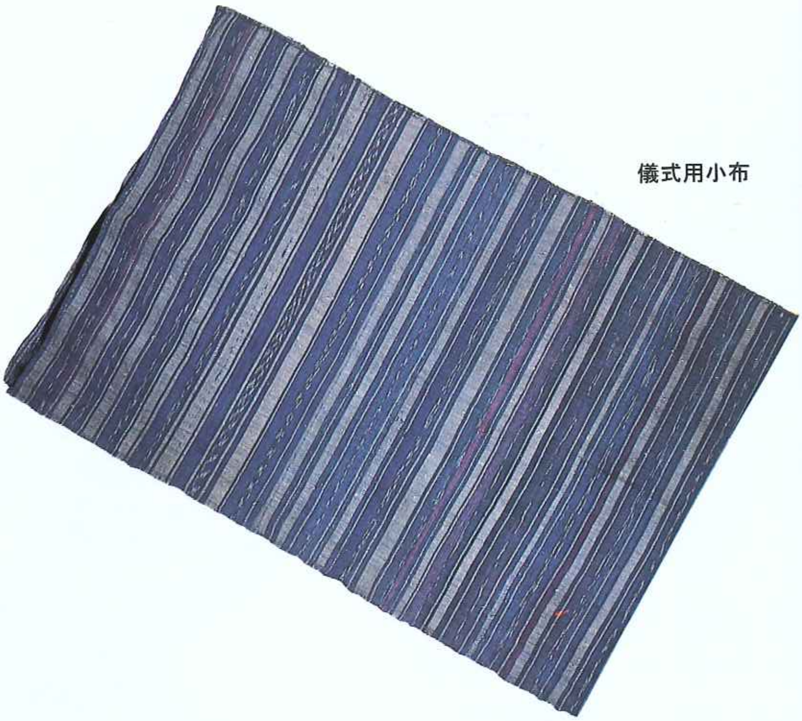
ウィピール

uji族）

糸をつむぐ女性たち

レボリ（肩

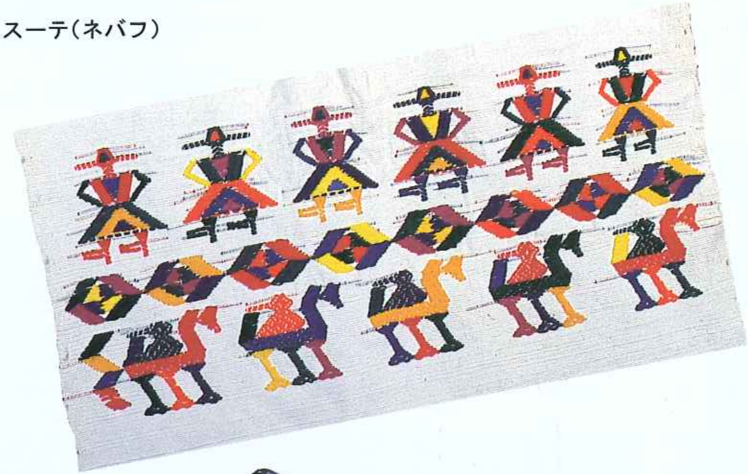
地機を織る女性



儀式用小布

ファハ

スーテ（ネバフ）



スーテ

掛け）（ネバフ）

旧い三島町の紺暖簾

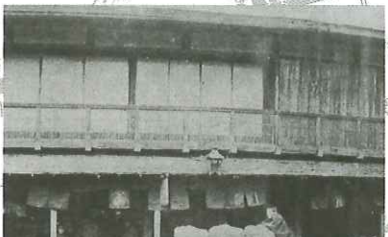
かつての三島では、街道に面した各商店が、各々の屋号や、家紋を染め抜いた紺暖簾を店頭にかけて商売を行っていました。

店を分けることを「暖簾分け」と称したり、「火事の時は、真っ先に暖簾を外し、腹に巻いて避難した」とか、「むかしの商店は、お互いに屋号で呼び合ったものだ」などと言われるように、商店の伝統的な屋号と暖簾は、その店にとって、何ものにも替えられない大切なものとされていました。

『東海三島雙六』(大正年間・郷土館所蔵)という資料には、旧三島町の商家写真が掲載されています。商店街の広告として作られたものと思われますが、これで双六をして遊べるようにも工夫されています。

今回の企画展では、この『東海三島雙六』に載っていて、かつ現在もほぼ同じ場所で商売を行っている5軒の商家の暖簾を復元展示しました。

(尚、5軒の商家には、企画展終了後、それぞれの店頭で、この暖簾をかけて頂きます)



展示品目録（内田コレクション・グァテマラ民族衣装類）

No.	展示品名	産地（部族名）	用途
1	ウィピール	ネバフ（Ixil族）	貫頭衣
2	コルテ	ネバフ（Ixil族）	スカート
3	レボリ	ネバフ（Ixil族）	肩掛け
4	ウィピール	サカプラス（Quiche族）	貫頭衣
5	ウィピール	チチカステナンゴ（Quiche族）	々
6	コルテ	チチカステナンゴ（Quiche族）	スカート
7	ファハ	チチカステナンゴ（Quiche族）	帯
8	ウィピール	チュラコ（Cakchiguel族）	貫頭衣
9	コルテ	チュラコ（Cakchiguel族）	スカート
10	ウィピール	パナハッチェル（Cakchiguel族）	貫頭衣
11	コルテ	パナハッチェル（Cakchiguel族）	スカート
12	ファハ	パナハッチェル（Cakchiguel族）	帯
13	ウィピール	サンチァゴ　アティトラン（Tzutujil族）	貫頭衣
14	リストン	サンチァゴ　アティトラン（Tzutujil族）	リボン
15	コルテ	サンチァゴ　アティトラン（Tzutujil族）	スカート
16	ウィピール	パリン（Pokomann族）	貫頭衣
17	コルテ	パリン（Pokomann族）	スカート
18	ウィピール	サン　ホアン　サカテペケス（Cakchiguel族）	貫頭衣
19	コルテ	サン　ホアン　サカテペケス（Cakchiguel族）	スカート
20	ファハ	サン　ホアン　サカテペケス（Cakchiguel族）	帯
21	ウィピール	サン　ホアン　コマラパ（Cakchiguel族）	貫頭衣
22	ウィピール	サン　マテオ　イスタタン（Chuj族）	々
23	コルテ	サン　マテオ　イスタタン（Chuj族）	スカート
24	ウィピール	コバン（Kekchi族）	貫頭衣
25	ウィピール	サン　クリストバル（Pocomchi族）	々
26	コルテ	サン　クリストバル（Pocomchi族）	スカート
27	スーテ	ネバフ	風呂敷
28	男性儀式用スーテ	ナウアラ（Quiche族）	々
29	男性用スーテ	サクアルパ（Quiche族）	々
30	男性用スーテ	ナワラ（Quiche族）	々
31	レボリ	産地不明	肩掛け
32	儀式用小布	トトニカパン	
33	儀式用小布	産地不明	
34	男性用パンタロン	サンチァゴ　アティトラン（Tzutujil族）	ズボン
35	ウィピール	サン　ルカス　トリマン	貫頭衣
36	ウィピール	スンパンゴ村	々
37	コルテ生地	スンパンゴ村	
38	ファハ		帯
39	リストン		リボン
40	ファハ		帯
41	ファハ		々

資料提供・協力者

井上一雄氏（三島市）
＊「糸機を支えた女達」のコーナーの、かつての機織り娘たちからの聞き取り及び写真撮影

内田明彦氏（函南町）
＊グァテマラのインディオの織物の収集と、提供

静岡市立登呂博物館（静岡市）

浜松市博物館（浜松市）

「三島の町の紺暖簾」コーナー協力者
- 吉川ボタン店
- 文盛堂書店
- 山城屋染物店
- 扇屋洋品店
- 本町薬店
- 津久井屋酒店
- 遠州屋染物店

郷土館・企画展

糸機とくらし

平成　6年3月15日～5月15日

静岡県三島市一番町１９－３楽寿園内

☎ 0559-71-8228 FAX 0559-81-3730

三島市郷土館